

えすがたにようぼう
絵姿女房

新潟

むかし、あるところに、若者がいて、器量のいいお嫁さんをもらいました。あんまり器量がいいもので、若者は、毎日、お嫁さんの顔ばかり見ていて、いつこうに田んぼへ仕事に出ようとしませんでした。どうどうお嫁さんはいました。

「あんた、あんた。そんなに毎日わたしの顔ばかり見て仕事しなかつたら、食べていけなくなるよ。わたしの姿を紙に描いてあげるから、それを竹にはさんで田んぼのあぜにさして、見ながら仕事をしてくださいな」

「ああ、わかった」

若者は、お嫁さんに絵を描いてもらうと、田んぼのあぜにさして、それを見ながら仕事をしました。

ところがあるとき、大風がふいてきて絵が飛んでいつてしましました。

「ああ、えらいことになった」

若者はあとを追いかけていきましたが、絵はどんどん飛んでいつて、とうとう見えなくなってしまいました。

お嫁さんの絵は、お殿さまの屋敷まで飛んでいきました。お殿さまは、庭で絵を拾うと、

「なんと器量よしのきれいな女だなあ」 いって、家来に、

「この女、どこにいるのか探してこい」といいつきました。

家来は、絵を持つてあちこち探しあるいは、とうとう若者がお嫁さんと暮らしている家を見つけました。

お殿さまは、若者をよびつけると、むつかしい問題をふつかけました。

「灰で縄をなつて持つてこい。そうすれば絵は返してやる。できなかつたらおまえの嫁をわしによこせ」

若者は、

「灰で縄なんてなえるはずがない」と、青くなつて帰つてきました。お嫁さんは、「そんなこと、わけはない。わらをよくたたいてやわらかにして、塩をつけて縄になつてから燃やしたら、そつくり灰縄^{はいなわ}がのこりますよ。それを持っていけばいいんです」と

いました。

若者はお嫁さんのいっただおり、わらをたたいて塩をつけ、縄になつて燃やして灰縄を作りました。そして、お屋敷に持つていって、

「灰縄を持つてきました」と、さしだしました。

すると、お殿さまは、「こんどは、

「では、打たん太鼓の鳴る太鼓を持つてこい」といいました。

若者が、青くなつてうちに帰り、

「打たなくとも鳴る太鼓なんであるだろか」というと、お嫁さんは、

「そんなこと、わけはない。畑に飛んでるミツバチをたくさんつかまえてきて、太鼓の中に入れてから、太鼓に皮を張ればいいんです」と教えました。若者がミツバチを太鼓に入れて皮を張ると、ミツバチが太鼓の中から出ようと皮にあたつて、ブンブンドンドン音をたてました。

若者は、お屋敷に太鼓を持つていて、

「打たん太鼓の鳴る太鼓です」といつて、さしだしました。

お殿さまは、

「では、こんどは、この曲がつた九穴の貝に糸を通してこい。通せなかつたら、おまえの嫁をわしによこせ」といいました。

若者がまた青くなつて帰つてくると、お嫁さんが、

「そんなこと、わけはない。貝の穴の入口に黒砂糖をぬつて、反対がわの穴から、細い糸をつけたアリを入れたらいいんですよ。アリは黒砂糖を慕つていくから、糸が通ります」と教えました。

若者がいわれたとおり、貝の入り口に黒砂糖をぬつて反対がわからアリを入れると、ほんとうに糸が通りました。お屋敷に持つていくと、お殿さまは、

「おまえはかしこいい嫁をもらつたなあ。いつまでも嫁をだいじにするんだぞ」といいましたとさ。

おしまい。

原話：『雪国のおばばの昔』水沢謙一／講談社

再話：村上郁